

創刊号が生まれるまで

——「農耕の技術研究会」へのお誘い——

雑誌『農耕の技術』は、「農耕の技術研究会」の機関紙として発刊されるものです。このあたらしい研究会は、実は、「作物学領域研究会」という会の活動を母胎として、あるいは、そこにおける前駆的な活動をうけて発足しようとしています。しかし、「作物学領域研究会」の性格と活動をそのまま継承し、ただ名称を変えただけのものではありません。わたしたちは、会の名称を変えるにあたって、あたらしく質的な転換をもねらっているわけです。

それにしても、「作物学領域研究会」という、まったく無名の、規約もなにもない小さな有志の集まりが存在しなかったならば、「農耕の技術研究会」が生まれる機運にならなかつたはずです。そこで、「作物学領域研究会」という、いささか奇異な名称の研究会の生い立ちと、今日までの活動を、そして、ここにその発展的解消に至るまでの経過を、いささか愛惜の情をこめて紹介することから始めたいと思います。

1. 作物学領域研究会の発足

この「作物学領域研究会」のメンバーは、農学分野のなかの作物学あるいは栽培学を専攻する研究者を主体としていました。別に会員を勧誘したわけではありませんでしたが、集会のたびに参加者もふえて、今日では20名前後の人が集まりますので、それが会員ということになりました。

最初は、京都大学作物学研究室周辺の数名が、現在の作物学や栽培学の分野にとらわれない、もう少し幅のひろい、そして人間くさい学問としての作物学・栽培学を考えようというようなことから始まりました。「領域」ということばのなかに、そうした気持を集約させていたわけです。いいかえれば、現在の作物学や栽培学の研究対象、あるいは“守備範囲”といったところから、とも

すればこぼれ落ちがちではあっても、けっしてないがしろにはできない「領域」、あるいは積極的にとりもどさなければならない「領域」に、おたがいの目を向けていこうという語らいから出発したわけです。

わたしたちが研究会を発足させるために最初の会合をもったのは、1972年8月8日、京都においてでした。ふりかえれば、すでに6年間が経過したわけです。

その以前から、作物学や栽培学の分野では、作物の栽培の学であるはずのこの分野が、あまりにも応用「植物学」的な傾向に収斂されてはいないかという疑問が出されていました。いわば、作物を実験材料とする応用植物学にすぎないではないかという批判がなされていました。また、本来的には人間の営為である栽培を対象とするにもかかわらず、この分野では、その事実を重視してさらに深く栽培のあり方を追究しようとする姿勢のない、“人間ぬきの学問”がなされているといった批判もありました。しかしながら、いずれも、直ちにその解答を示しうるほど簡単に対処できる批判ではありませんでした。いうまでもなく、批判が根底的であればあるほど、そして、それがひとりひとりの姿勢にかかわる基本的なものであればあるほど、それに対処することに多くの困難を伴うのは必然です。

ところで、わたしたちは、こうした批判に対してある種の共感をもちながらも、批判者の立場から実践的な解決がうちだされないことにも大きな不満をもちました。批判が批判にとどまる限り、それ自体が不毛で、また、きわめて安易な姿勢であるからです。「作物学領域研究会」に集まるメンバーは、たんなる批判者の側に立つのではなく、それぞれの能力と経験に応じて、すくなくとも実践的に、作物学のあたらしい、あるいは本来の「領域」の研究をしてみたいと考えたわけです。ひとりひとりがまったく同じ考えであったとはいえませんが、すくなくとも作物と人間とのかかわりを栽培という営為のなかに読みとる姿勢を、これからの研究のうえに生かしたいという立場は、共通していました。

もちろん、こういった方向へ向かうアプローチの方法はさまざまでしょう。

例えば、ある人は、ある作物のある地域への導入を歴史的に考察しようとするかもしれません。また、ある人は、ひとつの作物の栽培類型について立地論的な比較検討を行なうかもしれません。さらに、ある人は、一地域における栽培立地と種々の作物の選択との関係について事例的な研究を目指そうとするかもしれません。人によりアプローチの方法や視点のおき方はさまざまでしょうが、このような作業が作物学や栽培学の分野として、もっと積極的にとりくまれる必要があるのではないかと考えていたわけです。

最初にわたしたちが会合をもった背景には、以上のような経緯がありました。ふりかえってみますと、本当に小さな勉強会のような形で、たいへん生意気なようなことを論議したわけですが、こうした当初の熱気のようなものが、6年間もとにかく続き、今日、「農耕の技術研究会」へと続こうとしていることにひとつの感慨をおぼえざるをえません。

しかし、次第にメンバーがふえてくるにつれて、たんなる談論風発的な熱気だけではすまなくなってきました。具体的に目指すものは何か、また、どういう形で研究会を開いていくのかが討議されるようになりました。その結果、わたしたちの共通の理解として、研究会では、たとえ生硬なものであっても、主として作物栽培の地域性・歴史性を、“フィールドの匂い”のする一次資料に基づいて考えようとする報告を受け、会員相互で討議しようということになりました。また、会員ひとりひとりがそういったねらいで研究報告を行なうよう申し合わせました。同年10月に2回目の会合を開き、この研究会を、先述したようなわたしたちの意図をこめて、「作物学領域研究会」と名づけました。

2. 作物学領域研究会の活動

以後、わたしたちの比較的集まりやすい、学会の開催時や夏休み、冬休みを利用して研究会を継続しました。いま、ご参考までに、研究会での報告（報告者）を列記しますと、以下ようになります。

1972年12月23日：「主食」の構造——飢餓と豊饒の問題（渡部忠世）

1973年7月21日：インドのマメ・インドとマメ（前田和美）

ボリヴィアの農業と作物（高村奉樹）

- 10月27日：江戸時代初期農書にみられる作物と栽培体系（田中耕司）
 12月29日：対馬のソバをめぐって（氏原暉男・俣野敏子）
 1974年4月4日：シコクビエの形質分化と栽培様式（黒田俊郎・堀内孝次）
 7月20日：農学部卒業後の私——鳥取大学卒業生の現場からの報告（真山育雄・
 堀田信一郎・秋本義一）
 12月28日：研究会共同研究 テーマ「作物生産に関する 境界領域分野の 総合的研
 究」中間検討会
 1975年4月4日：同上報告書『作物生産に関する境界領域分野の総合的研究』合評会
 7月19日：焼畑をめぐって（佐々木高明）
 12月28日：韓国におけるセマウル運動ならびに水稲の試作（梅景 修）
 1976年4月1日：研究会共同研究報告書『アジア各国における主食作物の選択に関する
 比較検討』合評会
 7月9日：沖縄における水稲栽培（村山盛一）
 インド調査報告（前田和美・長谷川史郎）
 12月25日：沖縄における畑作の現状と問題点（丸杉孝之助）
 沖縄県農業見学報告（森脇 勉・名取一好・田中耕司）
 1977年8月21日：アメリカおよび西ドイツにおける農業教育の実情の一端（安江多輔）
 イランの農業と作物（黒田俊郎）
 12月17日：雑穀栽培の生態的考察（堀内孝次）

以上のような研究会を継続しながら、併行して、わたしたちは、文部省科学研究費補助金（総合研究B）による共同研究にもとりくみました。上記の2つの共同研究がそれです。これらは、いずれも、わたしたちが研究会のなかで何を指そうとしていたのかを、ある程度示していると思いますので、その報告書の内容をご紹介したいと思います。まず、『作物生産に関する境界領域分野の総合的研究』では、次のようなテーマを分担しました。

Ethnobotany とその周辺（渡部忠世）：文化人類学 および 地理学における食用マメ科作物の研究（前田和美）：文化人類学領域における 農耕変遷の研究（堀内孝次・黒田俊郎）：新大陸における灌漑農耕と作物（高村奉樹）：自然および人文地理学分野におけるマイナー・クロップの研究（俣野敏子・氏原暉男）：自然地理学領域における 作付体系の研究（森脇 勉）：農業経済学領域における農法の研究（田中耕司・梅景 修）：農業気象からみた世界の作物分布（長谷川史郎）：土壌学分野からみた作物生産（栗原 浩・木下 収）

これらのテーマは、作物学や栽培学が他のどのような分野とその知的な興味を共有しうるのか、あるいは、どのような分野の人たちと交流する必要があるのかといった、各会員の関心ある関連諸分野について、主として文献のうえでの整理を試みるために設定されました。

いっぽう、もうひとつの共同研究『アジア各国における主食作物の選択に関する比較検討』では、各会員のフィールドでの体験をもとに、次のようなテーマの報告をとりまとめることができました。

朝鮮半島における主食作物の分布と作付体系（栗原 浩）：韓国における水稲試作の経験から——セマウル運動と稲作の課題（梅景 修・木下 収）：韓国における畑穀類の構成と生産（森脇 勉）：フィリピンの主食作物栽培の歴史的背景（高村奉樹）：作物分布からみたビルマ農業の成立過程（渡部忠世・田中耕司）：インドの主穀作物の分布——水からみた場合（長谷川史郎）：インドにおける主食作物の多様性と分布——マメ類の作物的選択とその要因から（前田和美）：Nepal 山岳地帯の農耕について——ソバ属の分布および栽培現状調査を中心に（氏原暉男・俣野敏子）：東部ネパールの稲作——籾型の分布にみた一断面（黒田俊郎・堀内孝次）

ほんの一握りの、わずかなメンバーであったため、十分な活動はできませんでしたが、この6年間の研究会の活動は、わたしたちにとって稔りあるものとなりました。また、当初わたしたちが抱いていた作物学や栽培学に対するある種の「ものたりなさ」を、研究会の活動によって多少は補えたのではないかとも思っています。しかし、この評価は、わたしたちが将来にもっと本格的な仕事をなしうるかどうかにかかっているといわねばなりません。

3. 雑誌『農耕の技術』の発刊へ

雑誌の発刊が具体化したのは、以上のような研究会の活動のなかからでした。当初、わたしたちは、研究会での報告を収録した、研究会誌を想定しました。わたしたちのそれぞれの時期における仕事を記録にとどめ、また、わたしたちの仕事に対する批判を仰ぐための報告集として、さらに、作物栽培や農業に関心をもつさまざまな分野の人たちとのささやかな交流誌として、研究会の名称を冠した、『作物学領域研究』と題する部内報的な雑誌を計画しました。

しかし、ここに至るまでの経過を読んでいた読者には、『作物学領域研究』という雑誌がどんな目的で発刊されているかを理解していただけるかと思いますが、はじめてこの誌名を見る人たちは、この誌名からどんな内容を想像するだろうかという疑問がわたしたちの脳裏をかすめました。わたしたちが「領域」ということばにこめた思い入れが、正しく伝わるどころか、逆に、ある限られた作物学の領域に閉じこもったような印象を与えはしまいかといった心配が頭をもたげてきたからです。いうなれば、わたしたち内部での符牒としては「領域」ということばも意味があるものの、雑誌の誌名としては誤解を招きはしないかという疑問も生じてきました。

それとともに、むしろこちらの方が大切なのですが、わたしたちと同じような考えをもっておられる人で、わたしたちの知らない人がたくさんおられるのではないか。あるいは、わたしたちと異なる社会科学や人文科学の分野で、わたしたちが考えているようなことを、やはり実践しておられる人も大勢いるにちがいないということにも気がつき始めました。内輪のなかで、こじんまりとした研究会をもつことの楽しみは別にして、わたしたちも他流試合にでかけて、同じ考えをもつ人と会い、あるいは時としてまったく別の考えの人にもまれ、「作物学領域研究会」を、もっと幅広い視野のなかに解消して、そこから、あたらしい発展をした方がよいのではないかと考えるに至ったわけです。いろいろな分野の方に参加していただくうえからも、『作物学領域研究』という誌名では、あまりにもなじみにくいからです。わたしたちの期待し、意図するところと名実が伴うためにも、『作物学領域研究』という誌名を捨てて、『農耕の技術』をあたらしい誌名といたしました。

巻頭の「創刊のことば」にも述べましたように、“作物の栽培や家畜の飼養についての歴史性や地域性を明らかにし、なによりも、人間の営みとしての農業を考えてみる過程で、いわば近代「農業」に対置する内容として、「農耕」ということばを重視したい”というわたしたちのこの雑誌に寄せる期待をこめて、この誌名を選んだ次第です。ただ誌名を変えるだけでなく、その内容においても、上のような大きな枠組みのなかで、広く「農耕」における技術の問題

を学問的に追究しようとする報告を掲載していくつもりです。

いうまでもありませんが、わたしたちは「学会」を設立するわけではありません。それぞれの専門分野をこえて、まったく自由な学際的研究の場であることを念じています。従って、雑誌『農耕の技術』は、このような問題に関心をもつあらゆる分野の方々に開かれた雑誌でありたいと思います。“フィールドの匂い”のする、「学会誌」の論文の形式にとらわれない、読者諸氏の大胆な論考や報告が寄せられるよう期待しています。

雑誌の構成は、当面は以下のようにしたいと思います。大きくは、論説・研究ノート・書評といった区分にわけ、論説では、「農耕」における技術的な問題、あるいは文化的な側面について、あるまとまった考えを提示しようとするような報告をとりあげ、研究ノートでは、たとえ生硬ではあっても、一次資料にもとづいた斬新な報告を掲載します。そして、書評では、たんなる書物の紹介にとどまらない、十分に吟味された評論をとりあげるようにしたいと思います。書評もひとつの研究のジャンルであるといった姿勢があらわれているような積極的な評論を期待しています。誌面の都合もありますので、原稿の制限枚数を、ひとつの目安として、論説：40～60枚、研究ノート：20～40枚、書評：20枚程度としますが、もちろん、これにとらわれることなくご寄稿いただいても結構です。巻末の投稿規定・執筆要項をご参考のうえ、読者諸氏に積極的にご投稿いただくよう、あらためてお願いいたします。

なお、発刊に至るまでの経過からご理解いただけるとは思いますが、『農耕の技術』創刊号は、「作物学領域研究会」の会員の発起というかたちで発刊いたします。しかし、次号以降は、後述します「農耕の技術研究会」の会員数名で構成する編集委員会が、その責任において発行にあたる予定です。編集委員会で各号を企画しますとともに、投稿原稿の検討も行ない、充実した誌面をお届けできるよう努力していきたいと思います。

4. 農耕の技術研究会への入会のお勧め

先述しましたように、雑誌『農耕の技術』の発刊を機会に、「作物学領域研

研究会」を発展的に解消し、あらたに「農耕の技術研究会」を設立します。

既成の学問の枠にとらわれることなく、「農耕」をめぐる諸問題について、諸分野の研究者、技術者が自由に交流できる会として、このあたらしい研究会を位置づけたいと思います。

研究会の活動としては、もちろん、雑誌『農耕の技術』の発刊がひとつの大きな作業となりますが、雑誌の推進母体としては、むしろ、研究例会を活発に開いていくことの方が重要な今後の課題になるかと思えます。これを年に何回程度開催すればよいのか、まだ成案を得ていませんが、あたらしい会員の入会状況を判断して決定する予定です。わずか10数名の会員であった「作物学領域研究会」ですら、年3回程度の例会をもつことができましたので、会員が増えれば増えるほど例会の回数も多くできるかもしれません。しかし、いっぽうでは、会員数が増えるにつれて、そう頻繁に会員が集まるわけにもいかないといった事情も予想されます。まだ、成案を得ていないのは、こういった不確定な事情があるためですが、とりあえず第1回の「農耕の技術研究会」の例会を来年5月に京都で開催する予定です（詳しくは、99ページの研究会案内をご参照下さい）。

研究会の事務局は、従来の研究会の組織を踏襲して、京都大学農学部作物学研究室に設置されます。会員の入会手続きや研究会の案内等の実務にあたるために、代表者1名、事務・会計各1名の構成で事務局を担当します。89ページの入会案内をご参照のうえ、同封の振替用紙で入会のお申し込みをいただきたく思います。

最後にあたり、皆さんの積極的なご入会をあらためてお願いいたします。